

岳陽樓に登る（杜甫）

昔聞く洞庭の水

今上る岳陽樓

呉楚東南に坂

乾坤日夜浮ぶ

親朋一字無く

老病孤舟有り

戎馬関山の北

軒に憑つて涕泗流る

昔聞洞庭水 今上岳陽樓

呉楚東南坂 乾坤日夜浮

親朋無一字 老病有孤舟

戎馬関山北 憑軒涕泗流

解説 岳州（湖南省岳陽）にある岳陽樓に登つて作つたもの。

語釈 ※岳陽樓Ⅱ湖南省岳陽市にある高殿。洞庭湖に面し、はるかに君山が望まれて風景がすこぶるいい。※洞庭水Ⅱ洞庭湖に同じ。※呉楚東南坂Ⅱ坂はひらく。さける。呉は洞庭湖の東方、楚は湖北・湖南両省と浙江・河南両省の一部。呉や楚の地が洞庭湖によつて東と南にさけているの意。※乾坤日夜浮Ⅱ乾は天、坤は地。天地の万象が日夜この洞庭湖の水面に浮かんでいる。湖の大きなことを言っている。※無一字Ⅱ手紙の来ないこと。※老病Ⅱ年をとつて病気にかかっている。※有孤舟Ⅱ一そうの舟がある。作者は舟で放浪の旅を続けていたのである。※戎馬Ⅱ兵馬。戦争をいう。※関山北Ⅱ多くの関所や山々を隔てた北方の地。長安をさす。※憑軒Ⅱ楼上の手すりによりかかつて。※涕泗Ⅱなみだ。涕はなみだ。泗はなみず。

通釈 私は昔から洞庭湖の眺めのすばらしいことを聞いていたが、今はじめてこの岳陽樓に登つて、それが噂どおりであることを知った。楼上から眺めると、呉と楚の地とは東と南の方にさき分れて果てしなく広がっており、また、この広大な洞庭湖の水面には、天地のすべてのものが昼も夜もその影を映している。実にすばらしい眺めである。この雄大な景色に対して、ふとわが身をかえりみると、故郷の親戚や友人たちからは一通の便りもなく、老いて病気になる身には一そうの小舟があるだけである。思えば多くの関所や山々を隔てた長安のあたりでは、今なお戦争が続いていることであろう。故郷に帰ろうにも帰れないのである。楼上の手すりによりかかつて、国の前途を考え、己の流浪を悲しんでは、自然と涙があふれ出てくるのであった。